

第二章 ぶぜん祭り

1 敵島神社百手祭

祭礼の場所 敵島神社 豊前市大字八屋

祭礼の日程 毎年二月の第一日曜日

祭礼の起源 不詳

氏子の範囲 明神

由来 日本では古くから正月から春にかけて、一年の豊作豊漁を祈る予祝の神事

や、吉凶を占う卜の神事がしばしば行われます。豊前地方から筑前北部にかけて見られる百手祭ももてまつりもその一つで、それは、的に向けて矢を射る、そして、的の矢の当り方で吉凶を占ったり悪霊退散を念じたりする祭です。市内八屋の明神ヶ浜にある敵島神社でも、毎年二月の第一日曜日(1)の百手祭が執り行われます。豊前のあちこちに鬼にまつわる伝説があります。敵島神社には「股手の藪」と呼ばれる小藪があり、そこには悪事を働いて人々を困らせた鬼の股と手が埋められていると言い伝えられています。ちなみに、鬼の頭は椎田の海に埋められたとされます。

祭礼の内容 「豊前路の祭」梅林新市 洵南社 昭和三十七年(1)に当時の詳しい祭の様子が紹介されていますので、参考までにその抜粋を紹介します。

祭の準備

【二月二〇日】 奉仕する人々で打ち合わせ。前年の座で当番をくじて定める。七人を選びその七人をつつまえ(当前)という。夕刻には明神町参事宅に集まり、上座に氏子総代が座り協議を行なう。昭和二六年の記録によれば協議内容は以下の通り。

一、今年の御礼の座(おりのざ)の切銭は百五十円、本座は百二十円。
二、切銭及びクマの米(クマは奠で神に供える精白米の意、古代米をクマと称していた)切り集めは二日の午前九時から二六日の二回で終わる。

三、椀(古くより伝来の木椀があった)は破損が甚だしいので、昨年の座で二六年から折り詰めを用いることになったので、折箱を準備する。終了後、煮魚一椀と酒一升で祝つ。

【二月二一日】 九時から七番目のくじに当たった当前が布袋を背負い、他の当前が木椀を持ち、お礼の座、本座に列する家を廻り米を集める(切ると言つ)。クマン米はお椀一杯と定めているが、すり切りにすると鼻の低い子が生れると言つて、各戸共山盛りにして渡す。

【二月二六日】 二二日と同様に米を集める。

【三月四日】 献立の検査。当前の七人は七日乃至二〇日間潔斎。別火(女手のかかったものは一切食べない)。献立は女手を借りないで、一切男手でつくる。お礼の座は多少緩和されている。

御礼の座の献立

吸物〓餅、烏賊、昆布、里芋、根深(又はたこのて、大根)二椀

酒〓引附(一人に二合入燗瓶一本宛配置)

刺身〓尾羽以毛(おばいけ)、鶏冠菜(とさかのり)

御神酒〓三杯、鰯二尾台附

組附〓蛸の頭、蒲鉾、羊羹、豆腐、蜜柑

取肴〓人參、里芋、鰯

引物〓御菓子

本座献立

御神酒〓三杯但鰯二尾台附

酒〓引附

吸物〓蛸の手、大根

盛相〓一ツ(赤飯を型に入れて押したもの(但し胡麻塩附)

刺身〓尾羽以毛(おばいけ)、鶏冠菜(とさかのり)

組附〓蛸の頭、蒲鉾、羊羹、豆腐、蜜柑

中盛〓田作(たつくり)

夕刻、当前の七人が献立通り料理を終わった頃、宮総代が検査する。昭和二五年まで使用した膳、椀類は数百年来のものと言われ、かげたり割れたりして使用を中止した。朱塗りの椀の底に「百」と書いたものは損傷が甚だしい。黒塗り、金模様入りの吸物椀は、かげないものはひとつもない。かげたものが膳についていると「おかげさまで」と笑っていた。検査が終わって尾頭付きの鰯を肴に酒をくむ。

【三月五日】 御礼の座に列する人々は、早朝わざわざわかし古超(ふるこえ)の風呂屋で入浴して体を清める。会場は明神町の青年会館で、当前の家からそれぞれ加勢人が一人宛出て準備する。呼び使いの青年は袷で御礼の座につく家々を廻り、「御礼の座が始まりますからすぐきてください」と案内する。御礼の座の使いは七回半(ナナケーリハン)いかなば来ないといわれ、八度目の途中で出てくる風習になっている。

御礼の座の配置

座の正面が神座で、中央に「敵島大明神、祭神市杵島姫八大竜王、大宮司従五位下藤原宗彝謹書」の幅物を掲げる。この幅物は一番くじに当

たつた者が自宅の床の間にかかげ、一年間朝夕礼拝する。神座に向かつて左手に次のものを供える。

・三宝の上に薄板を富士山型に盛り上げたものを一つ・脚の高いおみきすず一対に清酒

・胴の太いもの一対に甘酒　・三宝に盛った大鯛二尾　・横にゆり箱ゆり箱は縦一尺二寸五分、横一尺五寸六分、深さ三寸六分で四隅をやや丸く作る。この中に白米三升三合三勺を入れホコと称する頭を円錐形にし二つの輪型をくまどつたもの二本を米の中に突き立てる。ホコは直径八分、長さ八寸三分。

・甘酒入手桶

この手桶は一番くじに当たつた者が購入して甘酒を仕込み、祭が終わると自家用に使用する。一番くじの者はシヨウケ（竹ざる）を新調して甘酒をこしあとは自家用とする。

右手には百手に使用する品々をおく。

・弓二青竹に芋の弦を張る。弦の長さ六尺。

・矢二青竹に白紙の羽をつけたものを二本。矢の長さ三尺二寸。

・的二竹の輪に白紙を貼り墨で大きく「鬼」と書いてある。的は一枚、何れも直径一尺九寸六分。

・敷奠座一枚二丸めて立てかけておく。これは七番目のくじに当たつた者が新調、終了後は神社のものとする。座の横に献立表が筆太に一間半ばかりの長さに書いて張り出している。

座の進行

(一〇〇〇) 紋付袴姿の座員が集合。当前七人も同じ姿で接待する。一番くじのみ着用。

(一〇三〇) 宮司が正面に着座。その左右に氏子総代、その他着順に着座。

下座に当前七人が控える。座員以外は如何なる人も参列することが出来ない。取材時には総代が特に座員に理由を述べ了解を取った。席上種々の報告協議が行なわれる。座元は引附酒を一人一本宛配り、再び下座に一列に並び「誠にお粗末であるが、ゆるゆる召し上がって頂きたい」と挨拶して立って酌をする。

御礼の座引物菓子

引物のお菓子は煎餅三枚、直径三分位の線で作られた横六寸、縦六寸ばかりの揚羽の蝶に似た形の麦粉の菓子、それを乗せた大煎餅は一枚貝の形に作つてある。

座が終わると宮司は二つ折りのマイ(三寸四角の白紙を斜めに二つ折

りにしたものを)を当前の一人一人に渡す。一同これを口に含み、宮総代は青竹五尺ばかりの上部を白紙で包んだヒモロギを捧げ、宮司、当前の一番は御供飯、二番は神酒、三番はゆり箱、四番は弓、五番は矢、六番は的、七番は奠座をそれぞれ持ち、その後から御礼の座の人々が続き、殿島神社前の股手敷(ももてやぶ)に向かう。

祭りの進行

幕目の法(ひきめのほう)

殿島神社左手に股手の敷という場所がある。鬼の股と手を埋めてあると言ひ伝えがある。頭は椎田の海に埋めてあるという。股手の敷には七五三縄を張り巡らせてある。持参のヒモロギをこれに立てかけ、的は敷の中間に掛け、前に奠座を敷き八脚の机に幣、弓、矢を置き、座元とその他の者が着座。

修祓

大祓の祝詞奏上

十度祓いの儀

第一矢、的の上一尺を射る。

第二の矢、的の下一尺を射る。

第三の矢、重ねた二枚の的を射る。

一同拍手拝礼。

以上、悪魔をはらう幕目の法という。この的、弓、矢は参拝者が争つて戴く。

殿島神社の神事

神殿に御供飯、ゆり箱、神酒、三宝の鯛を供え、座元が上席、一同着

座して修祓、大祓祝詞奏上を行い、二二〇〇終了。

本座

(二二〇〇) 神事終了後、十二時過ぎから青年会館で本座が行なわれる。

参列人員は約八〇名で、配膳の前に座る。御礼の座参加者三三人も加わる。氏子総代が上座正面に着き、挨拶、協議を行なう(御礼の座と同じ)。神前の三宝に供えた二尾の鯛を本座の人々に見せる。上座からかわらけて神酒をついで廻る。また手桶からくんだ甘酒を廻す。これは各自の吸物椀の蓋に受けて飲み、酌は当前の人々がする。

当前のくじ引き

神前に二つの盆を置き、一つに芦を一寸に切つたものが乗せてある。くじ引きの資格のある者が呼び上げられ、それぞれ芦を一本とつて空の

方の盆に入れる。白紙に番号を記入したくじを人数分だけ作り、これを資格のある者に引かせて一番から七番までの新しい当前を決める。神前に供えた御供えその他の神饌を本座の人々に一箸ずつ分け、本座の儀を終える。終了後、当前と来年の当前七人ずつは残る。当渡し

長机を縦に置き旧当前が一番から順に座る。その前にソギに盛った肴一皿（膾一切、大根、人参のあえたもの）箸一膳、杯一個を置く。氏子総代が上座に下向きに座りその横に介添一名が控える。新当前は机を隔てて一番から順に座る。氏子総代から旧当前に対しお礼の言葉を述べ、新当前に挨拶する。旧当前は一番から順に神酒をいただき、済むと準備をしていた肴（膾一切、大根、人参のあえたもの）を新当前その他に配膳し酒をくみかわし、当渡しの儀式を終える。

くじに当たり新しい当前になることを「当あたり」という。当渡しの儀式がすむと各自の家で酒宴が行なわれ、友人、親戚、知人は祝酒を持参し夜を徹して飲み明かす。当あたりは本人はもとより、酒宴に加わった者を含めマンが良いと（運がいい）と言って喜ぶ。

記録

明和四年（一七六七）からの「百手祭御礼人数改帳」が残される（現在まで四五冊）。大富神社保管。

当前旧一番が新一番に渡すもの

厳島大明神掛幅、献立表（箱入り）、袴（つづら入り）、ユリ箱、御供椀、当前を引いたものは三年間くじを引かないしきたり。

御礼の座に出席する資格は親族の最年長者であること。

昭和一〇年ごろには神田（かみだ）があり、その収穫で御礼の座、本座に米一石の補助があった。ちなみにその頃の本座の人員は一三〇人、酒六斗を要した。

明治初年の頃は旧曆を用い二月二日に執り行った。

献立は定められたとおりに行われ、いいだこが無い時に下関まで買いに行ったこともあった。

ゆり箱は故百合（本）治吉の家が奉納したといい、三升三合三勺の米は宮司に贈る。

由来は宇島の二本松から鬼が出て悪さを働いたので退治し、百手の藪に股と手を埋めたとも言う。

先代の宮司は海岸から二本松方向に矢を射たが、現在は逆になっている。

祭礼の様子

凶の方向に向かって射るのが正しいかどうかは不明。

百手祭ではしめ縄の張られたその小藪に神霊が宿るといつても口を立てさらに藪の中ほどに鬼と墨書したのかけ、それに向けて三度弓を引き矢を射ます。第一の矢は的の上一尺を、第二の矢は的の下一尺を、第三の矢は重ねた二枚の的を射抜きます。これを悪魔を払う、暮目の法ひきめのほつと呼びます。暮目（引目）とは木製のやじりのことで、数個の穴があつて、これを射るとき空気がその穴に触れて一種の音を発することにより、魔物を追い払つたこととされます。

なお、前年の祭の座で翌年の当番を籤引きで定め、当前やつまえ」と呼ばれる籤で当たった七人が、百手祭のいさぎを受け持つて、奉仕するまみりです。

かつては祭りの作法や出される食事の内容など、厳格に事細かく執り行われていましたが、今では簡略化されています。



百手祭り(大正時代)



暮目の法



祭壇



幅物

2 求菩提山のお田植祭

祭礼の場所 国玉神社 豊前市大字求菩提

祭礼の日程 毎年三月二十九日

祭礼の起源 奈良時代【伝承】

氏子の範囲 求菩提山お田植祭り保存会

由 来 松会は、求菩提山や英彦山をはじめとする旧豊前地方の修験道寺院で行われた神仏習合の祭りで、神幸祭、田行事、幣切り行事の三つで構成されてきました。

祭りはまず、神幸祭で神輿が繰り出されます。神輿には仮に神に姿を変えた仏（権現）が乗るとされ、その前では豊作祈願の「仁王経（たんのつきまう）」が読誦されます。続いて田行事が行われ、幣切り行事が祭の最後を飾ります。田行事の行われる広場を「松庭」、そこに立てられた柱を「松柱」と呼びますが、幣切り行事では、山伏が御幣を背に持ってその松柱に登り、柱の頂から真っ白な御幣を切り落としてみせます。切り落とされた御幣は神の御種子であり、それは松庭に時かれた初穂と交合するとされ、その年の豊年満作が約束されるといわれています。

求菩提山の松会は「縁起」によれば、奈良時代に始まると言われますが、今のところその起源を特定することはできません。ただ田行事の衣装箱が残されていてその蓋に「建暦三年（一一三三）二月二十九日」の墨書銘があり、鎌倉時代にはすでに松会が行われていたことが窺えます。

祭礼の内容

松会はもとも神仏習合の祭ですが、現在求菩提山では国玉神社の神事として「神幸祭」と「田行事」のみが伝えられ、「幣切り行事」は戦後途絶えたままです。祭は毎年三月二十九日、国玉神社中宮前の広場で、春の種まきから秋の採り入れまでの農作業を真似ての所作が神歌にあわせて「トモフス」繰り広げられます。祭はまず午前中に神幸祭として御神輿が御旅所に向かう御くだりが行われ、そのあとに松庭で神楽の奉納（倉屋神楽講）が行われます。午後、国玉神社中宮前の広場（松庭）に「遣巻（やりまき）」と呼ばれる神歌が流れるなか、いよいよお田植祭の始まりです。米作りにかかるお百姓の農作業が「トモフス」演じられてゆきます。その内容は

畦切り

菅傘を被った白装束の男が畦草を刈る様子を演じます。すると草の中から蜂が出てきて、慌ててそれを追い払う様子が観衆の笑いを誘います。

田打ち

花笠を被った稚児が登場し、二人一つが歩み出て木製の鍬と棒を叩き合わせ

て田打ち（鍬で耕す）の所作を真似します。

畦塗り

鍬を担いで現われた白装束の四人の男たちが、大きな動作で畦を塗って行きま

田鋤き

ます。のついのついで張子の牛が登場し、田を鋤いて行きます。懸命に手綱を操る牛使いをあざ笑うように、牛は反対方向進んだり、寝転んだりとなかなか言うことを聞きません。その「トモフス」な掛け合いがこの祭の最大の見せ場です。

種子蒔き

「トモフス」のついで花笠に赤や青の袴をはいた稚児が登場し、田植え歌に合わせて田植えの所作をします。その所作は形式的なものです。かわい子どもたちの単純な動きが、かえってほほえましく映ります。本来は早処女（そつとめ）による所作であったかと思われ、今は単に子ども達がその役を担っています。

田植え

「トモフス」のついで花笠に赤や青の袴をはいた稚児が登場し、田植え歌に合わせて田植えの所作をします。その所作は形式的なものです。かわい子どもたちの単純な動きが、かえってほほえましく映ります。本来は早処女（そつとめ）による所作であったかと思われ、今は単に子ども達がその役を担っています。

孕み女（うない）

女装をした孕み女（身持ち女）と、うない（初花乙女）が大きな鉢にてんこもりのご飯を抱え、柄鏡と櫛で御髪を整えながら「トモフス」に松庭を廻ります。孕み女（うない）は生命の誕生を豊作に擬えたもので、穂ばらみを期待する所作といえます。

田誉め

最後に傘をさした神官を先頭に演者全員が「トモフス」の掛け声とともに松庭を廻ります。この時、演じる者、観る者が一体となって大合唱となり、祭を締めます。「トモフス」の所作は近隣の他の田行事には見られず、求菩提山で特徴的な所作といえます。

「トモフス」の所作を演じる人たちは松役と呼ばれ、かつては修験者（山伏）がこれを行っていましたが、現在は麓の石屋地区の保存会の人たちが祭を支えています。最後に神楽が一番舞われ、狐仙鬼を先頭にお神輿が御旅所から本殿に向かう御のぼりが行われ、祭は終了します。



田植え



蛙塗り



御神輿行列



田鋤き



種蒔き



田耨め



孕み女・うない



畦切り



田打ち

3 清原(せいげん)神事

祭礼の場所 嘯吹八幡神社(豊前市大字山内)

祭礼の日程 四月第二土白

祭礼の起源 寛平二年(八九〇)縁起

氏子の範囲 山内、大木、為国、中組、四ツ口、合原

行列の経路 一日目嘯吹神社、山内、大木、為国、中組、四ツ口、合原、清原神事場

二日目清原神事場、合原、四ツ口、中組、為国、大木、山内、嘯吹神社

由来 嘯吹八幡神社縁起書(年代不詳)によれば、祭は寛平二年(880)に始まる

と記されています。清原はもともと西南原と書き、後に勢原となり、現在

は清原と書くようになったといえます。はじめは一月霜月、初卯日に行

なわれていましたが、明治以降に四月の行事となり、現在は四月の第二王日に

執り行われます。中世には宇都宮氏、近世には小笠原氏の関与が知られ、祭

神は神功皇后(八幡神)、竹内宿禰、応神天皇、仲哀天皇で、それぞれの神輿で

御旅所まで巡行します。ちなみに嘯吹八幡神社の起源は仁寿二年(八五二)と

され、後に現在の須佐神社の地に遷宮し、文治五年(一一八九)に現在地に鎮

座したといえます。昭和初期までは大名行列の籠も出ていたが今はありません

祭礼を執行する上で重要な役割を果たすのが次官(じがん)です。次官は頭屋

制度の一種で、以前は千支の数(一一)の家が世襲していましたが、現在は山内

が二軒、下河内が二軒(軒は不在)でこれにあたり、責任役員(神社総代)の

七人が補佐しています。

行列の構成 塩桶、高幣、銚面、幣台、傘鉾、御神輿、傘鉾、御神輿

祭礼の内容 第一日目(四月八日)まず朝早く八尋ヶ浜で次官が塩汲みをします。午前

中九時から山内が住城の大山祇神社に巡行し(三年に一度)午後二時頃には

神社に戻ります。午後三時から三基の神輿と傘鉾を中心とした神幸行列が

御旅所である清原神事場を目指します。行列の構成は次官(塩桶)、高幣(た

かべ)、銚面(鬼面の赤、青)、幣台(お上りは子ども会)を先頭に傘鉾、神輿、

傘鉾、神輿、傘鉾、神輿、の順に続き氏子はそれぞれ山内、大木、為国、中組、

四ツ口、合原の組み合わせて傘鉾と神輿を担ぎます。神輿の順番は山内だけ

が決まっています。お上りは一番目、お下りは一番目とされ、他はその年で違つ

つです。以前はこの後に神馬役、神官車、神官車が続いていました。また、高幣

がそれぞれの神輿と傘鉾を受け持つことになりました。途中須佐神社でお神輿

を鎮め、午後八時頃には清原神事場に到着し、入り口の「塚神社」猿田彦命、

天鈿女命で祭典を行った後、神事場に入ります。最後に神輿を浮殿に収納し

た後にお着ぎの神楽が舞われ、初日の行事が終了します。以前は宇佐神宮が

ら刀を携えた五四人の警護役が派遣されてきたといいますが、今は次官が御旅所に泊まって守護しています。

第二日目(四月九日)は午後一時から山内神楽講によりお立ちの湯立神楽が奉納され、同じルートでお下りが行なわれます。午後八時頃には囃吹八幡神社に戻り、神殿に神輿を納め全ての行事が終了します。拜殿では遅くまで神楽が奉納され、祭神の帰還を祝います。巡行の途中では決められた場所ですれぞれの神輿が高く天に掲げられ、また、氏子によって激しく回転させて雄姿を競います。

特別な内容 注連縄は独特な形式で、巡行コースの七箇所にて建てられ、昔は地区ごとによる大きさを競ったといえます。また、祭が終わると佐井川の井堰に再利用されていたとつです。現在は秋の収穫後に農家の納屋で藁を保管し、春の祭に備えています。



神幸行列



御神輿



神事(清原神事場)



傘鉾



傘鉾



傘鉾

4 大富神社神幸祭(八屋祇園)

祭礼の場所 大富神社(豊前市大字四郎丸)及び御旅所(八屋) 行列の経路 (神幸行列) 前 日 準備

一日目 大富神社、大村、田淵、上町、本町、楡八幡、下町、住吉神幸場
二日目 住吉神幸場、前川、広山、荻田、大富神社

(祇園車)

祭礼の日程 前 日 各町内、住吉神幸場(汐かき)、
一日目 各町内、住吉神幸場
二日目 住吉神幸場、各町内
毎年四月二九、三〇日、五月一日

氏子の範囲 (神幸行列)

櫛狩屋、内尾、八ツ田、梶屋、平原、上鳥越、下鳥越、高野、中組、荻田、広山、東船入、西船入、迫、杉ヶ谷、今市、荒堀、田淵、青畑、上大西、中大西、下大西、大村西、大村東、大村谷

(祇園車)

前川、住吉、明神、下町、上町、本町、一葉、中央、東八幡町、教授

祭礼の起源 聖武天皇二年(七四〇)【縁起】

この神幸祭は江戸時代までは名越祭と同時に旧暦六月二十九日に行われていましたが、明治初年に名越祭と分離して四月三〇日、五月一日に行われるようになりました。神幸祭の起源は古く、宗像八幡宮縁起によると聖武天皇二年(七四〇)、大宰府の藤原広嗣の反乱の時期まで遡ります。この反乱鎮圧に際し京都都大領外従七位上田勢麻呂、上毛都擬大領紀宇麻呂等、五郡の太守は戦勝を宗像八幡宮に祈願して出兵し、同十二年乱を鎮定して凱旋します。大守などは神力の偉大さを尊び、共に神威して宮殿及び神門等を造立して六月二十九日には八屋八尋浜に御輿を奉じて行幸し、茅輪神術の行法など行ったといわれています。

この神事が名越祭(神幸祭)の起源だといわれ、さらに神幸祭の行列は紀宇麻呂の凱旋のすがたを模したものと伝えられています。記録にあらわれる神幸祭の様子は多くありませんが、天保五年(八四四)の友枝文書によれば山車で浄瑠璃を講じたことや、船車、踊り車がすでに出されていたことが分かります。また、上町の古い道具箱には天保二年(八四〇)の墨書銘も見られます。

祭礼の内容 祭の前日(四月二十九日)には大富神社では茅輪作りや、神輿の準備などが行

われます。八屋の町では四月初めから始められた祇園の準備がクライマックスを迎え、踊り車は午前中には夕かきを済ませ午後からは各町内を廻り始めます。船車は午後には町内を出発し、御旅所で夕かきをした後に提灯で飾り付けを行います。一方の山鉾も午後二時頃には御旅所で夕かきを行なった後夕方にかけて前川橋附近で提灯の飾り付けを行います。そして船車と山鉾は上町の四辻で行き交い幻想的な提灯山となって観衆を魅了します。ここでは船車が四辻を明神方向に曲がるまでは山鉾は通過することが出来ず、昔はその通過を巡って諍いがある事もあったと言います。さらに、山鉾も上町が通るまで本町は通ることは出来ません。その上町の山鉾が狭い四辻を片方の脚を跳ね上げて九〇度廻す操作は入り山満点で見事としか言いよつない技です。

第一日目(四月二〇日)の午後には、神前で櫓を立てた船形(船御輿)のまわりには一文字笠、紋服、白扇姿の唄衆が蹲居し、船歌を唱和することから始まります。次いで感心衆の奉納(隔年で、神楽と交互に奉納)がすむと、笛衆笠鉾、船形、神輿二台、神職が乗った神馬の順で、八屋の八尋浜の御神幸場(旅所)まで巡幸(御くだり)します。途中、上町の三叉路で船車、明神、住吉(一年交代)が行列をお迎えし、これに従うように各町内の踊り車(下町、八幡町、前川)や山鉾(本町、上町)がそれぞれに御旅所を目指します。また、上町の四辻では行列、船車、踊り車、山鉾の通過する順番が決まっています。昔ながらのしきたりが守られています。おそろく江戸時代の八屋の町で、中心となる辻だったと考えられます。また、本町の宇都宮家では行列の通過後に古井戸から汲んだ水を当主が桶に入れて担いで御旅所へ向います。この水は翌日のお田植神事で使われますが、その謂れはよくわきまありません。さて、先に御旅所についていた行列は氏子達によって神輿の練り込みが行なわれ、順番に浮き殿に納められます。お着きの神事後、舟歌組による四季の口説が奉納され、再び「感心衆」の奉納で初日を終えます。そして、夕刻になるとまず船車が、次いで山鉾(午前中に飾り山に衣替え)が、さらに宵闇迫る頃には踊り車が次々と御旅所に到着し、祭はクライマックスを迎えます。山車が一気に広場へ入る様は勇壮で、祭りの醍醐味を感じさせます。

二日目(五月一日)は午前中に神事が行なわれた後、昼頃には踊り車が前川、下町、八幡町の順に出発します。午後一時からは盛り砂にチガヤの束を十八本植えて水をかけるお田植神事があり、次いで茅の輪を奉仕者がくぐりぬける茅の輪くぐりが行われます。午後二時半には神幸行列が御旅所を出発し、お上りとは別の広山を経由して大富神社を目指します。続いて午後二時半には船車が出発し、前川まで神幸行列を送った後町内を向います。さらに五

時半頃に上町、本町の山鉾が相次いで出発します。一方、感心衆はこの日は早朝から四郎丸の各神社で奉納を行い、神幸行列が大富神社に着く夕方七時頃をめぐりに神社でお着きの奉納を行います。大富神社に着いたお神輿は、各町内の氏子によって境内で練り込みが行なわれた後、御神殿に納められ祭りは終了します。

その頃、八屋の町ではまだ祇園車の巡行が行なわれていて、特に踊り車は新天街の三叉路で競演会を行い宇島駅まで巡行した後に各町内へ帰ってゆきます。こつした経路は最近のもので、本来は御旅所を出発した後踊りを披露しながら町内を向ったと思われま

行列の構成

小船(明神)、舟歌組(明神)、祭鉾(内尾)、大神(内尾)、水盃桶(高野)、幣台(湯越)、鉾面(杉ヶ谷)、社名旗(下大西)、幣台(桐ヶ迫)、茅ノ輪(下大西)、玉串箱(大村西谷)、苗箱(高野)、寶銭箱(大村西谷)、傘鉾(川内内尾)、神刀(川内内尾)、神馬御幣(川内内尾)、神輿(今市)、地官、傘鉾(大村西谷)、神刀(大村西谷)、神馬御幣(大村西谷)、神輿(荒堀)、地官、傘鉾(鳥越)、神刀(鳥越)、神馬御幣(四郎丸)、前谷(萩田)、神輿(書畑)、地官(乗馬(宮司))

大舟(明神、住吉)、隔年交代(踊り車(前川、八幡町)、一葉、中央、東八、教校、下町(山鉾(本町、上町))。

傘鉾、大囃子、川内、獮狩屋、内野、八田、梶屋、平原(中囃子、大村(大村西、大村東)、小囃子、鳥越)

山車の特徴

八屋祇園では二種類の山車が登場します。

船車は大船と言ひ、明神と住吉の両地区が一年交代で出していました。近年は明神が毎年出すようになり、一基の大船が見られる年もありますが、もともとは一基であったのが後に二基になったと言います。その原形は戦国時代に軍船として発達した関船と考えられ、江戸時代には参勤交代に使われる御座船へと変わります。船は住吉丸と称され、たくさんのカラフルな幟を立て巡行しますが、四月二十九日の夕かきの後、夕刻には提灯の飾り付けを行ないます。山車の中では常に先頭を行く慣わしで、祭の象徴でもあります。全長七尺余り、高さ三三〇センチ程です。

山鉾は上町、本町の二基があり、それぞれに本体の高さは五尺余り、巾一六尺程、担ぎ棒の長さは九尺に及び巨大なもので四本の頑丈な脚で支えられています。これに飾りをつける高さは七尺も及びますが、明治三十八年の写真を見ると一〇尺を超える高さがあり、山鉾の規模が八屋祇園の勢いを現しているようです。四月二十九日の夕くみ後は見事な提灯山となり、本番では趣

向を凝らした飾り山に変身します。飾りの題材(外題)は塚武将ものが一般的ですが、見送りはその時々キャラクターも等も見られます。本体の作りは頭丈で、かき棒などは同じような構造をもつ博多祇園の山笠のものよりずいぶん太い物です。したがってその重量は二十を超えようと考えられ、巡行は前方の脚を浮かせ全体を押し出すようにして引きずるといったイメージです。かつては沢山の氏子により担いでいたとも言われますが、とても無理な気がします。

踊り車は前川、下町、八幡町の三基があります。それぞれ特徴があります。総じて長さ五間余り、高さ四間幅一七〇センチの大きさです。車の構造は「折屋根式」と呼ばれる跳ね上げ式の屋根を持つもので、中津型と言われます。各町内ごと四月中旬頃に引き出しが行われ、併せて子ども達によるお囃子の練習も始まります。お祭前日の四月二十九日には午前中に汐かきを済ませ、それぞれの町内を廻ります。この時前川では踊り車入れない地区で踊り子だけが出向く「座踊り」も披露されます。四月三〇日には各町内から御旅所へと巡行して一泊し、五月一には正午頃御旅所を発ち、祝儀をあげていただいた場所まで踊りを披露しながら進みます。現在、踊りは中津や宇佐の一座による歌謡歌舞伎となっていますが、以前は稚児歌舞伎や浄瑠璃等であったと言われます。車の順番は特に決まっていますが、今回は前川、下町、八幡町でした。

特別な内容 地官の役割として祭典のときに神が来ることを告げ、守護するとされ代々井上家が受け持つ決まりです。神幸祭では四月二十九日の神移し、幣合、神輿の飾りつけと茅ノ輪造りを担当。また、祭期間中は神輿の後で幣を持つ。地官はもとも一八軒あったが、今は省略されているが、四月二十九日のお旅所のお供え物には今でも地官のための一八膳、角皿に田锥形に持ったご飯と、四角に切ったスルメとコブ、竹箸を添える(が用意される次の日は無い)。

舟歌組は明神、住吉でそれぞれの組があり、祭礼の始まりは全てこの舟歌組から始まります。舟歌組は二三人で構成され、その中心となるのは歌頭と呼ばれる三人です。舟歌組に入るのには特にしきたりは無い様ですが、歌頭は経験の長い人が勤めます。直立に紋付といつ出で立ちで全行程を神幸行列の先頭を歩き、決められた場所御舟歌を歌います。御舟歌は場所によつてその内容が異なりますが、最も多く歌われるのは四季口説と呼ばれるものです。「大富神社の神幸祭」は全てにおいて船舟(がその中心におかれていて、山車の大船やこの舟歌組はその象徴的なものです。それは大富神社の祭神が宗像三神といつ海の神であることと無縁ではなく、古くから船入(せんいゆ)といつ地名が残り、丘の上には帆船をモチーフとした装飾古墳(線刻画・黒部古墳六

号墳)が存在するなど、海とのつながりが強い地域ならではの特徴ではないでしょうか。

大富神社神幸祭御舟歌

四季口説

あらめでたいな 御世は エイわんわか「枝もエイエイさかよの エイこのやんは」

やんで初春の雪 黄緞の着背長も エイ「小桜緞となりけり エイさてまた夏は卯の花のエイかきえの水に洗い革 秋になりてその色はいつも戦に勝ち色の エイ紅葉とへまごう錦草 冬は雪での そをささらい デイデイデイ兜の星の菊の座を エイみな華やかにおとしゅうげの 思ふ敵を討ちとりて エイその名は高く揚巻の エイ剣は箱に収めおく 弓は袋にいださるし エイ富貴の御世と栄えける やらや」 めでたいの エイわんわか「枝もエイエイさかよの エイこのやんは」

天狗揃い(大富神社出発と神幸場出発のときなどに歌います。)

あれはおんこく程遠き 筑紫松浦のものなるが 今度このたび思い立ち 都いけんもうさんと「エイほどなく唐津につきにける」小綿山 裾野の風も「秋しみなれども 寢覚めさみけるさみしさは 松を絡むる藤の 森 エイ ゆんでは五社の稻荷堂 エイ東福寺やせんじょう寺 加茂や 春日や八瀬小原 ここは嵯峨の釈迦 エイ百千だんと聞くとときは むみよむにみよ社 エイげんたのみやこおん近く かねの鳥居になりぬれば 道者くにげする 若い道者の袖をひく エイ本社の前で示現して さらば参詣もつさんと 愛宕山にはあたるん坊 富士にからん坊 箱根の坂にこおるん坊 高野山にはこおりん坊 奈良にすきさかすきもと坊 エイ吉野はどつや小桜の エイ堺の浜にみつらん坊 浪の上なる水神坊 エイ熊野はでんげおもとかや エイみなことごとく祈誓して さらば下向いたさんと やらや」めでたいの エイそれわんわか「枝もエイエイさかよの エイこのやんは」

泰平楽(楡八幡神社で歌います。)

あらありがたの浮世かな そもそも人皇百余代 御宇には「泰平楽とおさまりて こよせ繁盛の御世なれば きいらい こおらい けんたんこくに至るまで エイ日本になびかぬものはなし 諸国 国々大名も エイ館を並べ棟続き 門外の駒にたてどころもなきよつに四方の景色のたまのとの 光り輝く金銀の エイいさを積んでおもしろや やらや」高き屋(神幸の道中注連縄のあるところ)で歌います。)

高き屋に登りてみれば 煙立つ 民のかまども 賑わいてつれし エイ



神幸行列



傘鉾



傘鉾



御神輿(神殿)



傘鉾



御旅所の祭壇



住吉大船



明人大船



上町傘鉾



前川踊り車



本町傘鉾



下町踊り車



八幡町踊り車



舟歌組



お田植祭り

それわんわか 「枝もエイエイさかよの エイこのやんは」
 着き船(神幸場入り口で歌います。)
 こぎいでて 思う港に 着きの船 ひより心にかのうたり うれしめで
 たいの エイそれわんわか 「枝もエイエイさかよの エイこのやんは」
 双葉の松(丸江商店前で歌います。)
 いつみても かわらじものは 笹の葉と 双葉の松と 君とわが仲じゃ
 うれし めでたより エイそれわんわか 「枝もエイエイさかよの エ
 イこのやんは」

5 山田の感心楽

祭礼の場所 大富神社 豊前市大字四郎丸

祭礼の日程 四月三〇日、五月一日

祭礼の起源 天平一三年(寛書文書)

氏子の範囲 四郎丸

奉納の場所 一日目 大富神社、住吉御旅所

二日目 杉ヶ谷(永神社)、上迫(稻荷社)、迫(大歳神社)、西船入(毘子社)、

広山(毘子社)、萩田(四公神社)、萩田(貴船神社)、湯越(天満神社)

高野(高木神社)、中組(大己貴神社)、大富神社

由 来 大富神社は宗像三女神、住吉三神、八幡大神、斎主神など十柱が合祀されて

いますが、この神社では、春の神幸祭、夏の夏越祭、秋の御供揃祭と三つの大祭があり、中でも最も規模の大きいものが春の神幸祭で、この時に隔年おきに奉納されるのが「山田の感心楽」です。

感心楽は大地感心楽又は国楽とも呼ばれていますが、その起源は寛書文書に天平一三年(七三三)から二年間行つた後に延宝五年(六七七)まで中断し、その後、現在まで継続されているとあります。もともとは六月三〇日、七月一日の夏越祭で行われていましたが、明治一〇年頃からこの時期に行われるようになりました。その目的は五穀豊穡、雨乞い、天下泰平、国家長久の祈願であり、人事を尽くして及ばざる最後の手段として神の前に一念を捧げ、その年の豊作を祈願したといえます。

祭礼の内容 舞の中心になるのは、中楽六人と団扇使一人で、団扇使は袴に菅笠、角団扇をもち楽の指揮をとります。

中楽は前垂、今の皮の腰蓑、赫熊をつけ、締太鼓を胸前にし、背に幣を立てます。囃子は笛、鉦があり、笛は二人、袴に菅笠、鉦は一人、黒足袋に黒脚絆、黒い着物とされます。祭の最初にその由来である祭文を読むのが読み立てで、正副二人があたり二、三歳の子どもが烏帽子に袴姿で勤めます。丸大団扇持ちは一人で、表に感心楽、裏に国楽と書いた五尺ほどの大きさの団扇を円陣の中で使います。汐水取りは黒着物で柄杓を持ち控えます。また、側楽(花楽)として中楽と同じ服装の子ども達が参加します。本来は三〇人程とされますが、その年によって人数にばらつきがあります。さてその陣形は中央に幣をたてて、団扇使、中楽を内側に、側楽、囃子と三重の円陣を組みます。そして、撥を大きく振りあげ太鼓を打ち、踊り、神と感心しながら十九楽を演じてゆきます。大富神社は宇佐八幡に關係の深い社で、この楽は宇佐には残っていない楽の源流を伝えるものとも考えられていて、勇壮なそして

激しい舞として人気があります。

感心楽祭文

抑音楽の起こりを尋ね奉るに、地神第一代天皇天照大神岩戸に閉籠もり給ひし御前において、猿田彦大神馬船をふせ、其の上にて拍子を取り神楽を舞い給ひし其響調子に協ひ神明感心在て六合明に四海風閑に悪鬼四鏡に退き四民安くなりぬ。因て茲に音楽起れり、堂上においての音楽は楽器の内に琴瑟を加えて管絃とし、是を除いて音楽とする。今茲に奏する国楽は辺土遠国といふも、笛、鼓、鐘の三器を以て拍子を調合音楽に順ず是を聞くもの邪念忘却し、清明の心神に本づく夫れ音楽を以て民を和し国家を治め、四時の運行時に違わず、天地鬼神を感ぜしむること、上古、未代、天竺、震旦、日本三国の書記に明明たり、殊更大廟の祭礼に音楽あり、吾朝人皇四十二代、文武天皇の御宇、丁酉六月二十九日に始て掛まくも長き宗像八幡宮(大富神社)の広前に国楽を奏す、国家安全、五穀能生し稲穂は七束八束穂に実登、牛馬六畜の蹄に至る迄安全の祈願成就せり、是当社の神徳然らしむ処なり、かるがゆえに数歳の定日村里の古老群集し是を勤め畢

特別な内容

氏子は四郎丸で、前の谷(高野、中組、萩田)後の谷(杉ヶ谷、迫、西船入、東舟入)に分かれて練習を始め、二七、二八日には合同で行います。通常、前の谷、後の谷から二〇、二五名、全体で五〇人ほどの編成になります。側楽は本来四、五歳の子どもが担うが、現在はその年々で参加できる子どもが不定期に舞つよつです。中楽は新入りを新楽、四年目を中楽、年目を左引といひ、左引はリーダー的な役割を果たし、楽が途中で変化するときのきつかけを担当し、重要な役割を担います。六年目までの人で構成するのを本楽といひ、



中楽



囃子



読み立て

Bを含めた構成を代楽と呼び、初日の神幸行列のお立ちとお着き及び、次の日の水神社、大歳神社、貴船神社、大己貴神社は必ず本楽が行い、他は代楽が行なう。また八年目からは鉦を、一〇年目からは世話役となる。

6 宇島祇園(宇島神社春季神幸祭)

祭礼の場所 宇島神社(豊前市大字宇島)

祭礼の日程 五月二、四、五日

行列の経路 一日目 宇島各町内、宇島神社

二日目 宇島神社、神明、魚町、長者町、小笠原神社、蓬萊町、堂山神社

三日目 堂山神社、八千代町、千代町、恵比寿神社、恵比須町、宇島神社

五月五日は踊り車の順序は神明元町、魚町、恵比須町、千代町、八千代町となる。

八千代町となる。

氏子の範囲 神明、魚町、長者町、蓬萊町、八千代町、千代町、恵比須町

由 来 宇島築港中の文政八年(一八一五)六月五日の夜、時の藩主小笠原忠固公が海路参勤交代の途中、宇島築港工事の進捗状況を視察に訪れようとしたが、折からの時化で御座船が入港できませんでした。これを知った蓬萊町の漁民四〇名が十艘の小船に分乗して沖に漕ぎ出し、無事御座船天祥丸を港に曳航して、藩主の難を救ったといわれます。さらに翌日には御座船を沖まで見送り、祝の舟歌を連唱したところ、藩主は大変喜ばれたといわれます。

これを記念して、翌文政九年(一八一六)より六月六、七日の両日、殿様祭りとして祇園祭を執り行うようになったのが宇島祇園の始まりと伝えられています。現在では、宇島神社神幸祭(宇島祇園)として五月四、五日の両日、地区最大の祭りとして賑わいます。

祭りの日程は以前は五月一五、一七日、六月一五、一七日などの日程もありましたが、五のつく日なら良いとされました。また、宇島祇園は別名「イカ祇園」ともいわれ、日程が変わっていた原因はイカ漁の都合とも言われています。つまり山車を担ぐ町内は神明元町だけが商人町で、他は漁師町であったため、イカ漁の水揚げによって日程が左右されたと言つてものです。

祭の準備は四月一〇日頃に役員が集まり、祇園車を出すかどうかの相談をしてその上で細かな日程を決めていたといえます。宝来町では一週間前に長老が集まり、花もらいの場所を決めていたようです。そして二週間前くらいから車の組み立てを始めますが、ほとんどはばらして保管しており(神明はばらさない)、車輪は海につけていたり、油タンクにつけたりしています。昭和四〇年代初めまでは一週間程前に天祥丸を担いで海に行き、塩水で清め(洗つ)ていましたが、その後は堤防ができて行けなくなつたため樽に塩水を汲んで洗つたこともありま

す。踊り車の巡行の順番は昔から争いが多く、江戸時代には小倉から藩の役人がきて調整をしていたといえます。その後、昭和五〇年頃まではくじ引

きで決めていたが、その順番をめぐる争いが絶えなため今は固定化している。その原因は少しでも長く自分の町内に留まつて祭りを楽しみたいためといわれ、祭りの進行に支障をきたすこともあったといえます。鉢巻の色も以前は毎年くじ引きで決めていましたが、各町内で好みの色などがありこれも争いの種にもなつたので、昭和五〇年代頃から現在のように固定化したそうです。

天祥丸の舟歌の形式は首頭が上の句(大人)、地が下の句(子ども)で、全体で一〇分前後かかります。舟歌はシメ(注連)のあるところを歌い、一日目は神社でのみ引き出し歌として歌い、二日目が三ヶ所、三日目が三ヶ所ほどシメで歌い、最後は引き上げ歌を奉納します。

踊り車は昭和四〇年代初め頃までは歌舞伎(ちんこ稚児)や浄瑠璃をまじやうで、踊り子は中津や長洲から雇っていました。しかし、昭和五〇年代からは完全に歌謡歌舞伎に変わってしまっています。

巡航の経路はその時々で若干変更されますが、基本的に日豊線を超えないとされます。しかし、豊前市に合併した頃は八屋の公会堂まで花もらいに行つたこともあつたそうです。また、宝来町の祭りは五月四日、堂山神社と恵比寿神社は五月五日なのでそれにあわせた経路になっています。

祇園車は明治か大正期に作られたものが多く、江戸期のものはない。記憶の範囲で新調した町内はないが、中津祇園から買ってきたものはある。また、昔は二台あつたといふが、はつきりしているのは元町(彫刻が宇島神社拜殿に保管されている)、若町で残りはどの町内かはわかりませんが、ただ、恵比須町はかつて四町とよばれ、戸数も多かったので可能性は高いといえる。

祇園車の見返りのデザインはそれぞれ特徴があり、例えば宝来町はかつて亀があつたことから亀を刺繍し、恵比須町は海老、魚町は鯛が描かれます。千代町は三階菱、八千代町、神明・元町は花菱を染め抜いています。昔は京都で作っていたといいますが、最近では中津の弓場染物店などにお願ひしています。

祭礼の内容 祭りは御神体を神輿や舟に乗せた山車が本宮から御旅所まで、各町内の神社で船歌を奏唱しながら進みます。船歌は老人が首頭を取り上の句を、子供は下の句を歌い、鐘と太鼓による「コンチキリン」の囃子に乗って威勢よく大綱で引き廻します。踊り車は昔は子供歌舞伎であつたものが、現在は歌謡曲による舞踊となっています。

五月三日は花(祝儀)賞いといひ、各町内から六台の山車(天祥丸、八千代町、千代町、恵比須町、魚町、神明元町)が出て地区内を練りまわし、商家

や有志の家に立ち寄り踊り等を奉納しながら宇島神社に集結します。翌四日(中日)は祭典の後、各山車が注連で踊り等を奉納しながら小笠原神社で休憩。最後は御旅所である堂山神社に入ります。五日(終日)は堂山神社(八千代町)を午後にお立ちとなり、神輿を先頭に町内を巡行した山車が宇島神社の前に一気に駆け込み、祭りはクライマックスを迎えます。舟歌が奉納され、踊りの競演と続き、最後に天祥丸の引き上げ音頭によって山車は町内に向かひ引き上げ、祭りは終わります。山車の勇壮さと壮麗さは一見の価値があります。

行列の構成 社名旗、高幣、鉾面、神輿、傘鉾(長者町)、船車(天祥丸、蓬萊町)、踊り車(八千代町、千代町、恵比須町、魚町、神明元町)

特別な内容

宇島祇園船歌(天祥丸船歌)

- 一、(音頭) やんらい 目出たいな 五葉をいな めでたのんの
えいそれわんわか
- 二、(音頭) 枝も栄々、三階の えい木の葉もんを
さても見事な お庭の小松 末は鶴亀 めで五葉の御松
めでたのんの えいそれ葉若
- 三、(音頭) 枝も栄々、三階の えい木の葉もんを
(音頭) よろづ 世と栄
(子) 君を巖の松が枝 えい九曜の春を かんさむらさねば
こつかにも ホンヤンラ
- 四、(音頭) 住吉の
(子) 松が枝 ぜんしんこんとはを思ふオーイ 鶴つけんてん
ながいハイハハハハ 舟はさいきんそ おいなんは
神と君の道すぐに見え風も長閑けき 豊の海波の響きも
静かにて ヤラヤんだ
- 五、(音頭) めでたのまん ヨホホン ホホホン ほんわんか
(子) 枝葉 繁々、葉も栄々
- 六、(音頭) 栄える
(子) のーんやはんははん 葉もははん はしいよ えいえい
えいさひさし オウ葉繁る
- 七、(音頭) めでたのん やーれ栄わんか
(子) 枝 葉も、やーよ
- 八、(音頭) 永々栄える
(子) のーえい こんの葉もんを

天祥丸引き出し歌

ヨイトナ アー天祥丸は 祝いの車 ヨイトナ ヤットコセ
ヨイヨナ アー時の座敷は
祝いの屋敷 ヨイトナ ヤットコセ ヨイヨナ
アー鶴と亀とが あの舞を舞う
ヨイトナ アレワ アリヤンヤ ヨイトヨイトコセ
アーこれでも 行かなきゃ 若い衆よ頼む ヨイトナ



傘鉾



踊り車(魚町)



船車「天祥丸」(宝来町)



踊り車(恵比寿町)



踊り車(千代町)



踊り車(神明元町)



踊り車(八千代町)



御神輿



船歌(稚児)



御旅所(堂山)

7 角田八幡神社神幸祭

祭礼の場所 角田八幡神社(豊前市大字中村)

祭礼の日程 五月二〇日、二一日(五月第三十日)

祭礼の起源 不詳

氏子の範囲 馬場、中村、畠中、西町、松江、高杉

行列の経路 一日目 角田八幡神社、馬場、雲見神社、中村(永神)、高杉(公園)、
松江(恵比寿神社)

二日目 松江(恵比寿神社)、松江(七社神社)、畠中、
角田八幡神社(東廻り)

奇数年は豊前祭が奉納され、お旅所は七社神社となる(西廻り)。

由 来 かつて、角田八幡神社の春の神幸祭は角田、松江、西角田の三地区で盛大に

執り行われ、楽打ちの他に「基の山車(西町七社神社、恵比須神社)三台の御

輿(馬場、畠中、西角田)二台の傘鉾(中村)が参加していました。行列は角田

八幡神社を出発し馬場、中村、畠中を巡行して、西廻の年は松江の七社神社

に、東廻の年は恵比須神社を御旅所として一泊し、翌日には再び角田八幡神

社(帰るルート)を辿りました。

行列の構成 現在は角田、松江の氏子により執り行われていて、楽打ちも一年に一度神

楽と交代で行われ、神幸行列は太刀(一人)、鉾(一人)、旗、傘鉾、傘鉾、神輿

で構成されます。

豊 前 祭 角田八幡宮の豊前祭は祭文によれば貞観六年(八六四)とされています。豊

前祭は囃し方六人(大太鼓、小太鼓、大鉦、小鉦、笛、踊り方二十人程度、読

立一人、介添人一人で構成され、読立人が祭文を読み上げた後、やや小ぶりの

太鼓を胸に抱えた踊り方がお囃子に合わせて、右に左にと回転しながら舞



七社神社(畠中)



神幸行列

います。太鼓は比較的ゆつくりとしたテンポで、鉦、鉦と絶妙な音色を醸し出します。



傘鉾



傘鉾



高杉公民館



豊前祭



松江の通り



雲見神社(馬場)

8 石清水八幡神社春季例大祭

祭礼の場所 石清水八幡神社（豊前市大字久路土）

祭礼の日程 五月三日

祭礼の起源 不詳

氏子の範囲 鬼木、上小路、神小路、宮小路、横小路、下小路、岸井、堀立、梶屋、広瀬、高田、東皆毛、西皆毛、小石原

行列の経路 石清水八幡神社、広瀬、高田、南皆毛、小石原、西皆毛、岸井、堀立、梶屋、久路土、鬼木、久路土、石清水八幡神社

行列の構成 社名旗、傘鉾（鬼木）、高幣、神輿、傘鉾（宮小路）、高幣、宮神輿（堀立神輿）、傘鉾（岸井）、高幣、神輿（子ども）、書銭箱

祭礼の内容 もつ一台子ども神輿あり以前は神輿を担ぐとき鬼木、上小路、神小路、宮小路、横小路、下小路と岸井、堀立、梶屋、広瀬、高田、東皆毛、西皆毛、小石原で分かれていた。二基のうち一つは宮神輿と呼ばれ、やや重たかったために午前と午後で交代していましたが、朝八時から始まる巡行は夕方までに及ぶ、全ての経路で御神輿を担ぐと言つ意味で昔からの伝統を踏襲しています。



神幸行列

御神輿



石清水八幡神社



傘鉾



傘鉾



傘鉾



神幸行列



足切神社神殿



御神輿



傘鉾



幣台

9 足切神社神幸祭

祭礼の場所 足切神社（豊前市大字赤熊）

祭礼の日程 四月一五日（六日）

祭礼の起源 不詳

氏子の範囲 赤熊上、赤熊下、赤熊南、戸津田、昭和町、足切神社、昭和町、戸津田、一本松信号、宇島乳児園、宇島公民館昭和町、赤熊、足切神社

由 来 かつては公富楽といつ楽打ちがあり、「カッパ楽」とも称され、雨乞いの祭りに奉納されました。その由来書によれば、孝徳天皇（六四五～六五四）の時代に旱魃が起り、悪疫も流行したので赤熊村の建立寺の僧が二日間の断食をし、祈願をしました。その満願の日には白髪のお告げで火酢芹尊の樂を奉納せよと教え、一れが起源と言います。

行列の構成 鉾面（青、赤）、社名旗（高幣）、幣台、傘鉾、神輿（傘）、傘鉾、神輿（抱ぎ）

内 容 旧赤熊村を巡行する祭りで、一部宇島と地域が重複するのはその成り立ちが影響していると考えられます。

畑神幸祭（春季例大祭）

祭礼の場所 水神社 豊前市大字畑

祭礼の日程 四月第四日曜（以前は四月一九日、更には五月一九日のときもあった）

祭礼の起源 不詳

氏子の範囲 畑の上、中、下、山谷、竹ノ下、原井

行列の経路 水神社（湯出川原）、八幡神社（山谷）、塞神社（竹ノ下）、猛勇神社（原井）

水神社

由来 角田八幡神社の末社として神幸祭では四社を巡りますが、いつからこのようにした形態になったかは定かではなく、七〇歳前後の古老の聞き取りでもすでにこのようにした形態であったといえます。昭和三〇年代までは山車も出ていたことから祇園の名称が残っています。山車の部材は今も一部（かき棒など）保管されており、かき棒の長さは七尺ほど、山車の高さは四〜五尺にも達したといえます。ただ、巡幸していたのは下組までで、それより下には行かなかつたそうです。昭和一〇年代以前には山沿いの旧道を通っていたようです。以前はお神輿や御幣、傘鉾など全て担いでいましたが、今は台車に乗せています。幟旗は畑小学校があった頃には二〇人近い子ども達が担当し、傘鉾も囃し方が居ましたが、今はテープを流すようになりました。子ども神輿も二年前に奉納されたまま、今は担ぐ子どもが少なく水神社に安置されたままです。各神社では畑神楽が奉納されていますが、今は大村神楽に依頼しています。

行列の構成

内容 高幣、五色の流し幡（幟）、傘鉾、御幣、幣台、鉾面、御神輿、御神輿と傘鉾は畑上組、中組、下組が毎年交代で担当します。御幣は山谷、竹ノ下、原井の氏子が一年交代で担当しています。



神幸行列



御神輿など祭具



寒神社

沓川祇園（沓川神社春季例大祭）

祭礼の場所 沓川神社 豊前市大字沓川

祭礼の日程 五月五日、六日

祭礼の起源 不詳

氏子の範囲 沓川西区、沓川中区、沓川上区

行列の経路 沓川神社、大分製紙、東芝、豊前マイカセンター、島田幸一郎前

折り返し（金毘羅宮、神社）

行列の構成 賽銭箱、高幣、神輿、傘鉾（東組）、傘鉾（西組）、傘鉾（中組）

内容 年毎に各地区が順番に引き受けとなり、執行する。

特別な内容 金毘羅宮が聖地とされる。



神幸行列



御神輿



傘鉾

三毛門祇園（春の神幸祭）

祭礼の場所 春日神社 豊前市大字三毛門

祭礼の日程 四月第四日曜日

祭礼の起源 不詳

氏子の範囲 三毛門、森久六郎・二楽

行列の経路 春日神社、天神様、駅前通り、西出屋、クロタ、新池、東出屋、中出屋

東池、森久、六郎、春日神社

行列の構成 御幣、賽銭箱、傘鉾、神輿、神輿

由来 記録としてはありませんが、言い伝えによれば二〇〇年程前から続けられているといえます。通称「春祇園」と呼ばれ、災封しの禊祓があるといわれています。

内容 記録はありませんが、伝承では約二〇〇年前には始まったといわれています。

通称「春祇園」と呼ばれ、災い封じの豊饗があるといわれます。また、宮守(宮柱)と呼ばれる専門の神職ではない地元神主をかつての庄屋職の三毛門家現在の(別府家)が務め、祭りを取り仕切ります。これに各地区代表役員が加わり、年毎に各地区が順番に引き受けとなり、祭りを執行します。三楽地区もかつては氏子でしたが、現在は春日神社から独立し、三楽の貴船神社で祭礼を行っています。

特別な内容 宮守(宮柱)別府家

クワタは聖地とされ、昔堤防がない頃はそのまま神輿を担いで海に入っていました。タカも聖地としてかつては禊等を行なっていました。今は一号の神輿だけが巡行します。



神幸行列



御神輿



傘鉾

貴船(永久) 神社春祭

祭礼の場所 貴船 (永久)神社 豊前市大字永久

祭礼の日程 四月二二日

祭礼の起源 不詳

氏子の範囲 永久七〇戸程

行列の経路 貴船神社、永久橋、村内、永久信号、J A南部支所、楠田池、永久、貴船

行列の構成 賽銭箱、神輿(子ども)、囃子、提灯山

由来 祭の起源は明確ではありませんが、以前は立派な神輿があったといわれます。

戦後は地元の大工さんが神輿を作り使っていたこともありましたが、提灯山(人)と神輿(子ども)のスタイルになったのは二〇年くらいで、提灯山はありませんでした。もともと4月22日がお祭の日でしたが、今は直近の土曜日が

曜に行っています。囃子は昔から傘鉾では無く太鼓を担いでいたようですが、今は屋台のような構造の車に太鼓を収め、屋根に御幣を立てています。囃子方は、以前は氏子が勤めていましたが、最近では山内神楽講が担当します。



神幸行列



行列



提灯山

須佐(鳥越) 神社八朔の節句祭

祭礼の場所 須佐神社 豊前市大字鳥越

祭礼の日程 九月三日

祭礼の起源 不詳

氏子の範囲 鳥越

行列の経路 須佐神社、大富神社、大鳥居、前川、下町、厳島神社、厳島神社

本町(中野四辻)、上町、大村入口信号、須佐神社

行列の構成 賽銭箱、旗、傘鉾、神輿(傘鉾は傘と幕をつけていない)



神幸行列



御神輿



傘鉾

宗像（薬師寺）神社春祭

祭礼の場所 宗像神社 豊前市大字薬師寺

祭礼の日程 五月二四日

祭礼の起源 不詳

氏子の範囲 薬師寺

行列の経路 宗像神社、横武小学校、横武コミュニティセンター、薬師寺集会所、亀保の里

岩岳川沿いを通り狭間、宗像神社

祭礼の沿革 以前五月八、九日が祭礼の日で、狭間や鬼木、矢方までも遠征することもあった。戦前の或る時期には清原神事に参加したこともある。戦後は子どもが主な担ぎ手であったが、昭和四〇年ころからは子ども会が中心になって運営していた。最近は少子化で大人が手伝う。提灯、囃子、神輿、樽神輿（子ども）と続き、囃し方は傘鉾ではなく屋台風の単に太鼓を乗せている。



神幸行列



御神輿



樽神輿

貴船（狭間）神社春の神幸祭

祭礼の場所 貴船神社 豊前市大字狭間

祭礼の日程 五月二二、二三日

祭礼の起源 不詳

氏子の範囲 狭間区

行列の経路 神社 各戸、明照寺、明照寺 各戸、神社

内容 本来は御幣を先頭に鉾面、賽銭箱、傘鉾、神輿（大）、神輿（小）と並んでいたが、現在は神輿だけが巡行します。一日目は明照寺で終わり、二日泊していたが、現在は一日で全部を回ります。子供中心の祭り、戦後まもなくの頃には、神輿（大）は小学校高学年が、神輿（小）は低学年が担いだといえます。氏

子総代を中心として隣組が順番に引き受けとなり執行します。



神幸行列



御神輿

菅原神社神幸祭

祭礼の場所 菅原神社 豊前市大字前川

氏子の範囲 前川、本町、上町、下町

内容 二五年毎の大祭の時は神輿が出る（前回は平成二一年）。通常は毎年子どもによる樽神輿が出る。主に四地区の子ども会が行う。子どもが多い時は二台の樽神輿を出す地区もあった。



神幸行列



御神輿



巡行の様子



明照寺

豊前市の首戸神楽

岩屋神楽講

岩屋神楽講は昭和三年の御大典記念行事に際して神楽の奉納を行うべく、その前年より山内神楽講の坪根文市、大門常次郎などに師事して発足したと言われます。当時の発起人は岩松市蔵、尾家新太郎、尾坐清七、五家壮蔵、南元市蔵などで、初代の講長は林梅次郎が勤めたと言います。しかし、宝暦二年（一七六二）の三毛門手永による「村々社御改帳」に七社神社で毎年九月一五日に神楽の奉納が行なわれていたとの記録があり、さらに、南元家に残されている神楽面箱には安政四年（一八五七）の年号が記されています。こうしたことから、神楽講発足以前に神官の補助的な神楽奉仕者の集団が存在した可能性もあり、本地域の神楽奉仕者の変遷を知る上で興味深い史料です。さて、岩屋神楽講はその発足以来他地域の神楽とも積極的に交流を図り、犬ヶ岳の峠道を通して交流のあった津民神楽（現、大分県中津市耶馬溪）や唐原神楽（下毛町）の影響も見られ、講員には中津市耶馬溪の人もいるほどです。したがって、掛手草神楽の神楽歌や、五穀成就神楽など市内では他に見られない特徴もあります。こうした努力で講員も増え、囃し方には市内で唯一女性の参加も見られます。



大潮舞



手房神楽

山内神楽講

嘯吹八幡神社の社家、初山家によって伝えられたのが山内神楽講の始まりで、明治二年には成立していたと言います。当時の史料によれば明治十一年には教務分局より山内の神楽子六名に免許が出されています。そして、明治十八年には築城上毛郡役所より神楽の執行に対して式を乱し醜態を見せることのない様通達が出され、それに対して山内、下河内神楽組の各名前で誓約書が宮司に出されています。こうした史料を見ると社家から氏子に神楽の伝授を行うに当たり、国家ノ祭祀として神道の制度化を図る内務省が関与していたことが知られ、それは神楽が神社の祭祀として重要な役割を担っていたことを示しています。その伝授に重要な役割を果たしたのが坪根市太郎で、その後、坪根家は代々講長を勤めています。現在、山内神楽は式神楽一五番、奉納神楽一五番、湯立神楽二番の都合八番で構成され、豊前首戸神楽八番と称しています。特に、嘯吹八幡神社の春季神幸祭である「清原神事」で奉納される湯立神楽は、古式に則った斎庭が古の情景を醸し出し、まさに豊前神楽を代表する演目として見る者に感動を与えます。近年は子ども神楽よりもさらに低年齢の子ども達による「ヒビ」神楽が人気で、大人顔負けの見事な舞いには驚かされるばかりです。



乱御先



三神

黒土神楽講

豊前の神楽を語るとき、石清水八幡神社で代々宮司を務めた矢幡家を抜きにその歴史を語ることは出来ません。矢幡家にはかつて詳しい記録が存在していましたが、惜しくも紛失しました。しかし江戸時代中期、長谷川家に伝えられた資料で、当時の演目、謂儀（神楽の時言つ言葉）など詳細を知ることが出来ます。それによれば、当時神楽は矢幡家、初山家、長谷川家、清原家、高橋家を中心とした社家のみで奉納されており、謂儀などは当時と多くの共通点が見られます。さて、石清水八幡神社の縁起によれば神楽の起源は貞観三年（八六一）とされていますが、これは八幡神が京都の石清水に勧請された時期で、一般に八幡神を祀る神社に多い旨観勧請説と言われるものです。その矢幡家から氏子に神楽が伝授されたのは明治の中ごろとされ、成恒神楽にも同時に伝承されたと言います。明治三年の神楽組の組長は平井恒蔵で、当時は成恒の人が多かったと言います。その後城戸啓次郎、大石英蔵といった人々により、黒土神楽は全盛期を迎えます。戦時中は一時中断したようですが、戦後、西畑和馬らにより復興し、昭和四〇年代以降は青年団による伝承も行なわれました。御遷宮神楽やもめ神楽など近年復活したのもや、新しく創作したものもあります。



剣神楽



大蛇退治

二毛門神楽講

江戸時代、このあたりの社家であった高橋家によって伝授されたのが、二毛門神楽と言われます。近世文書によれば高橋家は高瀬村の社家とされ、現在の大分県中津市の人物で、土屋神楽の伝承にも関係したと想像されます。伝承される鬼面の一つには大保五年（八三四）の銘が見られ、現存する豊前の神楽面の中で年代のわかる最も古いものと言えます。豊前の神楽では普通「首戸開き」は演目の最後に奉納されますが、「こ」では式神楽の最後、七番目に舞われます。これは、かつては朝日が昇るのに合わせて首戸を開くと言つ、意味があつたためとされます。さらに「神迎神楽」では、邇邇襲命のお供をする神々と猿田彦のせめぎ合いの最後に、鬼杖を刀で真つ二つに切る所作や、綱駈仙神楽でも蛇にたどえた大綱を刀で断ち切る場面があり、他の神楽には見られない特徴と言えます。いずれも迫力満点で、見るもの度肝を抜く演目です。最近では「恵比寿神楽」といつ漁村ならではの新しい演目を加えるなど、古い伝統を守りつつ意欲的にその伝承にとりこんでいます。



地割



弓正護

大村神楽講

大富神社の社家、清原家によって伝授されたのが大村神楽です。その境内にある「大村神楽講百年祭記念碑文」には景行天皇の時代から神楽が奉納されていると記されていますが、それはそれとして、古く豊前の神楽は大富神社の相職であった清原家、長谷川家を中心に神職による神楽の奉納が行われていたと記録に残されています。その成立は少なくとも中世にまで遡り、社家神楽として盛んに奉納されてきました。そして、明治一〇年頃に大富神社宮司清原司から、氏子である大村局九市、平木孫市、大久保新一などに伝えられ大村神楽講として発足したとされます。こうした氏子は、社家神楽の時代に神職が神楽奉納をする時にその補助者として奉納に関わっていた人物と見られ、「ボンヤドン」と呼ばれていた人たちと考えられます。その後、大村神楽講の名は各地で知られるようになり、北九州地区を初め明治神宮や伊勢神宮、朝鮮半島にまで招聘され公演を行ったといわれます。戦時中は一時その運営に苦勞した時期もありましたが、昭和〇〇年代以降は豊前を代表する神楽講として活動を続けていく、子ども神楽の指導を通じて若手の育成にも取り組んでいます。大富神社では毎年、正月元日の口付が変わるとともに「湯立神楽」が奉納されます。燃え盛る炎の中で演じられる幻想的な舞は、まさに新しい年の初めを祝うにふさわしいもので、豊前の夜神楽を代表する光景です。



湯立神楽(火渡り)



湯立神楽

中村神楽保存会

中村神楽が伝承される角田八幡神社は社伝によれば貞観元年(八六四)に須田氏によって建立されたと伝えられ、古く宇佐八幡神社の荘園であった角田荘の鎮守として成立したと考えられます。角田荘の成立は長元四年(一〇三二)ですので社伝の時期とは異なりませんが、いずれにせよ古くからの地で人々を守護してきた神社であることは確かです。さて、中村神楽の起源は明確ではありませんが、伝承されている鬼面には古相を示すものが見られ、江戸時代には盛んに神楽が奉納されていたことが知られます。その系譜には諸説ありますが、現在のよつな里神楽の形態が整ったのは明治の十三年頃で、角田八幡神社の大宮司、角田紀博が氏子に伝授したものとされています。また、昭和十六年には台湾でもその奉納を行ったことがあります。しかし、戦時中には後継者不足で例祭奉納さえも中断しますが、戦後にはいち早く有志による復興が成されます。昭和四八年には中村区文化財保存会が結成され、神楽部、離子部、豊前楽部を設け、子ども神楽などの育成を通じて伝統文化の伝承を行なっています。今は、毎年角田八幡神社の秋の祭礼と、正月元日に奉納が行われ、多くの人で賑わいます。



一番神楽



岩戸開き

山人（やまと）走り

儀礼の場所 嘯吹八幡神社（豊前市大字山内、下河内）

儀礼の日程 一月二七日

祭礼の起源 不詳

氏子の範囲 山内、下河内

儀礼の内容

次官による神事として伝承されているもので、山内と下河内それぞれ二人の次官がいましたが、今は五人ずつに減っています。山人は当屋と呼ばれ、毎年当番で次官が勤めます。

前日、山内の当屋は榊を根っこから引き抜いてきて夜神前に供え、各次官の家に挨拶に回ります。

当日の早朝には山内の次官が八尋の浜にお汐井取りに行き、岩岳川（永久）の宮ノ下にある畑の大根二本を抜き、その跡に御幣を立て岩岳川で大根を洗って帰ります。

黒酒、白酒、台酒と清酒で代用、大根二本、汐筒、幣付きの榊二本を神前に供えます。

午前十時に次官（羽織、袴）が集まり祭典（シバ座）を行った後、鳥居の見える場所に齋場を設け、案の上に神饌を移します。そして、二人の当屋は白装束に白足袋、草鞋履きで、注連縄を腰に巻きそこに鉈を差して口には榊の葉をくわえ準備が整います。

午前十一時、齋場で宮司の持つ榊の下部を握った次官はその瞬間力ミとなり、掛け声とともに宮司が榊を離すとそのまま走り出します。鳥居をくぐり県道を横切り山内集落を抜けて歳越えの坂にある「七ツ石」を途中並んで走りながら目指します。

「七ツ石」では向かって右端の右に山内の左の端には下河内の山人が正座して心の中で祝詞を唱えます。そしてそれぞれ次の年の当屋の家に向かって走り始めます。その行程は二km程。

到着した山人は草履のまま座敷に上がり、来年の当屋からお神酒を大杯で三杯頂いたところで人に戻るとされます。下河内では腰の鉈を渡すと「頭渡し」といいます。また、座敷には「トキを敷く」ことから「トキ座」と呼び、午前中には終わります。

山内は正午頃来年の当屋の家で宮司、次官が集まり直会を、下河内は午後一時頃から同じく直会を行い、終了となります。



嘯吹八幡神社



七ツ石



山人

儀礼の場所 日吉神社（豊前市大字大河内）

儀礼の日程 一〇月三日

祭礼の起源 不詳

氏子の範囲 大河内

由 来

大河内の日吉神社に祀られている神様は、求菩提山を守るため京都からはるばるとお迎えした神様だといわれています。この神様は京都の日吉神社から海路、瀬戸内海を通り、沓川の浦に着いてそこから岩岳川に沿って当屋に着いたといわれます。そして法覚寺の裏山にあるおとんごせ」といふ場所に落ち着いたといわれます。これを知った村長は夜が開ける前に数人の村人を連れてお迎えに向かいますが、その時村人の一人が打ち振る「ヒイトギ」で明かりを取りながら村長の家まで案内したといわれます。途中、夜も明けたので「ヒイトギ」を道路わきの土中に突き刺していったところ、不思議なことに数日してその「ヒイトギ」の木から柿の芽が出たといわれます。一方、神社を建てるまで村長の家の座敷を仮御殿として過される神様のもとには村人が代わる代わる酒や「ヒイトギ」を差し上げたそうです。「ヒイトギ」から芽吹いた柿木は爾来、日吉神社の「神木」として大切にされ、今は何代目かわかりませんが根元は「ヒイトギ」といいます。

おとんごせ」とは屋におられた神様といった意味が。

「ヒイトギ」は松明の代わりに使われた明り取りで、燃え残りの薪の先に残る火の玉。

祭礼の内容 由来を裏付けるように、日吉神社には「山人やまんど」走り」といつ儀礼が伝えられています。

祭りは十月初申(はつきさる)日の午後1時に執り行われます。当日、神社に次官六人(以前は二人)と山人一人、それに宮司が午後二時に集まり、昨夜作った粥を入れた桶二つを神前に供える。

次官の一人が御供殿でお盆の形をした器(白木)に赤飯、染ご神木から取った小さい柿の実を三つ乗せ、これを八つ次官と宮司の分)整え、甘酒一桶、清酒一升を備えて控えます。

次官は口に柿の葉をくわえ、御供殿から神殿へ並び手送りで献饌、玉串奉奠を行います。

山人は山仕事の姿、荒縄を腰に巻き、鉈を差す(御幣の付いた柿の枝を持つ)で、神殿裏で待機します。

本殿左の疫神社で祭典が始まり、修祓のあと山人が「ゴドウ」といつ声を出し、このときからカミカカリとなります。

直ちに山人は境内南側の鳥居を走り出て旧道を通り二〇〇坪と先の「神木柿木」へ向います。目指す場所は時代によって変わってきました。大正時代までは元宮といわれる「おとんせ」(旧石屋小学校の裏山の祠)まで、昭和初期からは「神の柿」を継ぐ若木があり、山人の走る距離は短縮されましたが、元宮の神に祈りをささげる山人の役割に変わりはありません。「神の柿」にくくとこの荒縄を解き、この縄で持ってきた柿を「神木」に縛り付けた後、神社帰りカミから人戻るといいます。

疫神社祭典終了後、本殿から拝殿へ撤饌を行い、拝殿での直会を終了します。まあ、山人の役は次官が輪番で務める慣わしです。

特別な内容 以前は旧道を走る山人に石を投げつけたといえます。それは山人はカミであるので痛くないといふ、古い神事儀礼によるものです。

由来にある求菩提山を守護する神様とは、天台宗比叡山鎮守日吉(ひえ)山王権現ともいわれ、三諦即一(の思想が修験道に緩用される中、思想的影響を与えた結果とも考えられています)。

畑のどんど焼き

行事の場所 豊前市大字畑
行事の日程 一月一四日
祭礼の起源 不詳
氏子の範囲 畑

行事の内容

日本では昔から旧暦の一月一五日を小正月といひ、特別な日として意識してきました。その正月の行事は主に火を炊く行事、火の儀礼であることはよく知られています。これらは大きく三種類に分けられ、大晦日に聖なる火として家の中で炊く火と、六、七日(鬼火)一四、一五日(どんど)に外で炊かれるものがあるようです。これらはもともと一連の正月の火祭として行われていたと考えられますが、次第に変化して行つたようです。そして九州ではより古い習慣形態を残す漁村の祭として鬼火が残され、逆に山村や農村の火祭として「どんど」が受け継がれてきたと考えられています。

さて、豊前市を含む近郷ではかつてこの「どんど」焼きが盛んに行われていましたが、最近では余り見ることが出来ません。それでも豊前市内をはじめ中津市の福島周辺や耶馬溪、築上郡の一部ではまだ見ることが出来ます。

さて、どんど焼きは一般的には竹などを芯柱とし、松や杉を束ね塔のように積み上げますが、「畑地区」では少し変わった形態を見ることが出来ます。まず、二月の初めに竹と茅でおこもり小屋という建物を作り、毎晩地元の人たちが集まりおこもりをします。これはもともと神に對し身を清めると言ふ意味がありましたが、今では地区の交流の場となっています。そして二月一四日の夜、おれや注連飾りを建物の壁にくくりつけ無病息災、五穀豊穡を祈り火がつけられます。ばちばちと勢いよく燃え上がる炎は豪快で、まさに火の祭にふさわしい勇壮な祭です。

なお、同じ畑の原井地区や馬場でも同様の祭が行われ、小屋の規模はやや小さいものの伝統行事として受け継がれています。



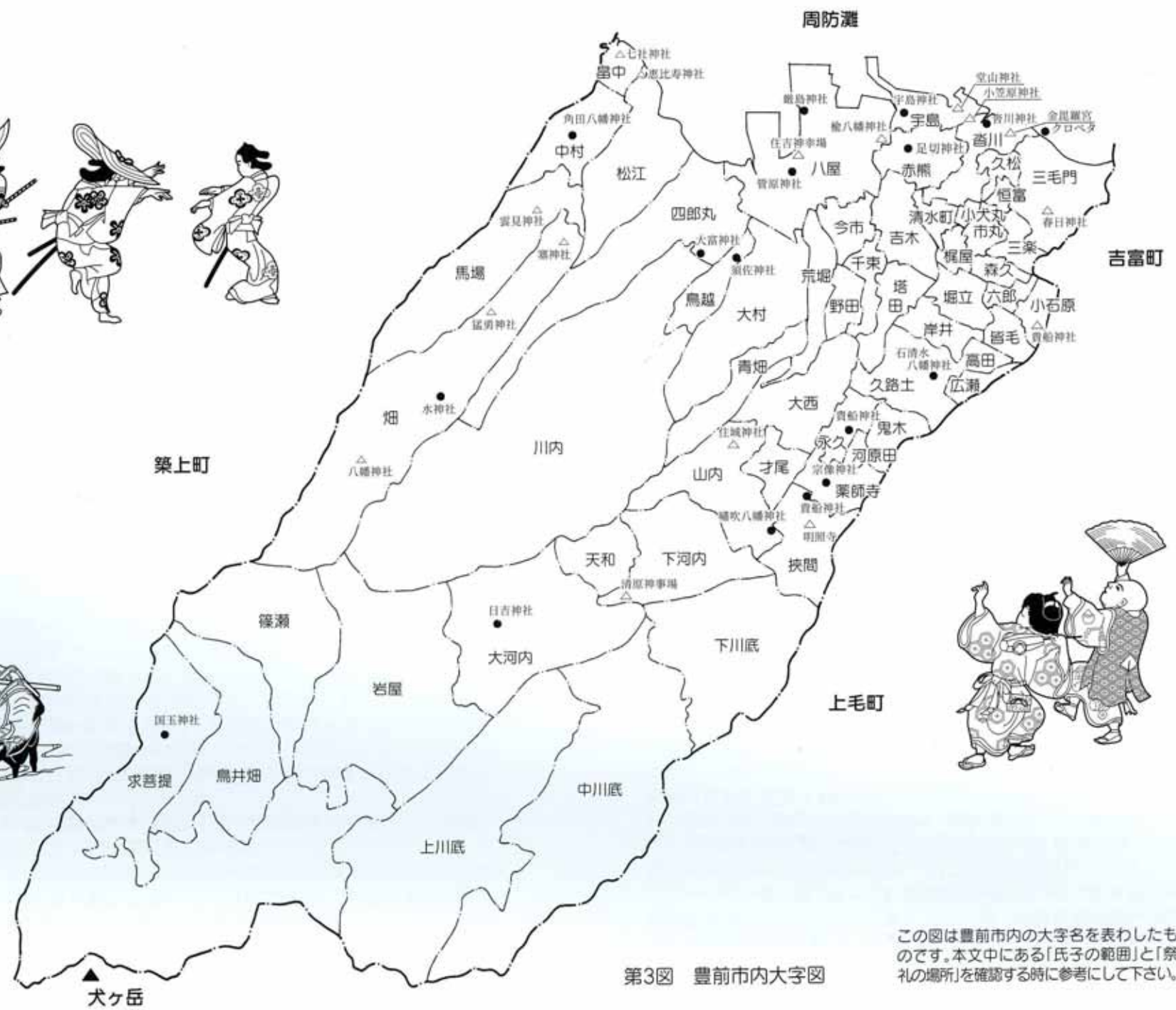
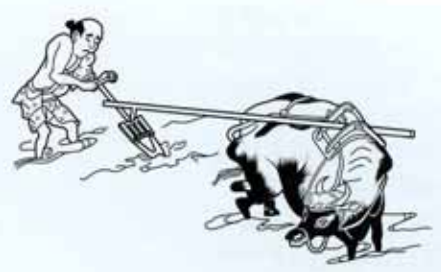
どんど小屋の準備



おこもり



どんど焼き



第3図 豊前市内大字図

この図は豊前市内の大字名を表わしたものです。本文中にある「氏子の範囲」と「祭礼の場所」を確認する時に参考にして下さい。